

平成20年度 総会・講演会・懇親会

総務委員会 委員長 大枝正人

去る5月20日総会が開催され、平成19年度事業報告、収支決算報告、平成20・21年度理事役員承認の件及び平成20年度事業計画案、予算案の全てが提案通り承認されました。なお、会長には梶山高志氏が再任されました。

第二部は、「心の時代を生きるために」というテーマで、吹田市在住の歌人 道浦母都子さんにご講演を願い、日本語の表現力の豊かさを改めて確認させて頂きました。

講演要旨：

古い時代、「心」を「うら」とも読んでいました。「うら」というだけあって「心」は眼には見えません。見えないだけに何か空しさを感じることがあります。いま物の溢れる暮らしの中にも何か空しさを感じることが多く、この空しさを補うのが人と人が交わす会話だといえます。会話を通じて人の心は通じ合うものです。

自分の心、自分の気持ちは、それを何かに書いたり話したりすることによって、「うら」から表にでて見えてくるものです。「言葉」即ちその人を表すもの、その人そのものと言えます。だからこそ言葉を大切にしなければならないのです。



私たちが日常使っている日本語は本来たいへん美しく趣のあるものですが、それが現代、俄かに崩れてきているように思え、そして、それに伴って日本人の心も荒んできたように思われてなりません。

言葉を文章にする一つの手段である短歌は、千数百年の歴史をもち、今なお多くの人の心を掴んではなしません。日本人であり、日本語を使って話しをし、生活しているものなら誰もが短歌をつくることができます。5,7,5,7,7で『うた』を作れば、美しい『うた』即ち『短歌』ができます。いま有る言葉を定形の中に入れることで短歌ができることを覚えておいてほしいと思います。『短歌』を作ることによって、心が純化されるだろうし、気持ちも整理されていくものと考えています。

美しいもの、感動を覚えたものを言葉で表し真情を伝えるもの、これが短歌です。現実がきびしいものであればあるほど、安らぎを求め、安らぎを手にすることが望まれますが、これを満たすものが短歌です。比べられるものに、5,7,5の俳句がありますが、これはどちらかといえば建て前が表にでていて、人生の機微にふれ、本音を語ることでは短歌の方がふさわしいと



いえます。

人を育てるためには、褒めることを知らねばなりません。褒め言葉が大切だと思います。人は認められ褒められると、もっと頑張ろうと思います。褒めるためにはよくその人を観察しなくてはなりません。短歌づくりも同様で回りをよく観なければなりません。優れたもの、美しいものを観る眼を養い、相手をよく観、さまざまな事象に関心をもたなければ『短歌』はできません。この『短歌』を創る心構えが、相手をよく見、よく知り、物事を丁寧に観るといふ経営者として大切とされる性格形成にも役立つものと思います。

所ジョージ氏の話には、『私は人を傷つける言葉を使わないようにしているんだ。』とありますが、これが同氏に対する評価の高い所以だと思います。人を傷つけるのも言葉、勇気付けるのも言葉。言葉を大切にしなければなりません。

ものの名前を知ることは結構楽しいことです。私は食べることが好きで、よく店を利用しますが大抵の店には花が生けてあります。名を知らない花を見つけるとその名を必ず聞くことにしています。

例えば、目の前に「草」が生えています。そ

れが「雑草」と思っている間は平気で踏みつけるでしょう、しかしその名が解れば踏みなくなるようです。名を知った途端、「雑草」にも一つの命があることになりませんが、実に素晴らしいことではないでしょうか。

実業界の方から『社員や関連業者の名前を覚えることが大切だ。』と、よくお聞きします。確かにそうだと思います。名前を意識した途端その人に対する思い入れが変わり、相手も「君、君」と言われるのではなく名前を呼んでもらうことで気持ちが変わるのではないかと思います。

目に触れるいろんなものを注意深く観る心、そしてそれから得られるものを表現する力、これらは短歌を創るための必要条件と共通するものです。大変な時代に生きているものとして、何かちょっと違ったものに触れたときノートに書き留め、それを5,7,5,7,7の定形にあてはめ、日本語の特性である豊かで美しい言葉で伝え、人と人の交わりの密度を高め、癒し、慰め、よい関係をつくり、『(ともしれば見失いがちの)心の時代を生きるために』役立ててくださるようお願いして、締めくくりの言葉とします。ありがとうございました。